

# 小田原史談

第 210 号  
発行所 小田原史談会  
小田原市酒匂2-24-13  
植田方 TEL (48) 9072

## 鈴鹿越・近江路紀行

(東海道五十三次 関宿〜京三条)

田中 みのる

小田原史談会 創立50周年記念事業  
「東海道五十三次宿場めぐり」  
2年をかけて成功裡に無事終了!

平成十七年五月、当会創立記念行事として日本橋を発した『東海道五十三次宿場巡り』は二年十ヶ月(日帰り七回、一泊二回)を要して、今回の「関宿〜京三条大橋」の行程で無事、踏破した。

### 第一日目 小田原〜関宿

三月二十九日六時五十分小田原駅西口に集結した面々は、全回参加者・メ括りだけはとそれぞれ思いをかけた三十五名が集結した。幸いにも気候は温暖、定刻七時出発、松田大井ICより東名に入る。ペテランガイドの説明は多からず少なからず、まだ初々しい陽差しの中を春風

に乗ってひた走る。車窓を流れる山間の木々にはまだ緑が乏しく、桜の花は散見するのみ全体が薄紫色にもやっていた。山間に白い花を一杯つけた辛夷が凛とした姿を見せていた。思わず「辛夷立つ あの時にも人の住む」と駄句を一つ。車内では早くも持参のおやつとの交換がはじまっていた。

足柄・浜名湖SAの小休憩を挟んで、豊田ICより伊勢湾岸道に入る。一昨秋、「知立宿〜龜山宿」で訪れた「しほり」の有松宿はこの高架下に位置するとか。左手に伊勢湾、右手は望める筈の木曾御嶽・伊吹山は霧に包まれて顔は見せていない。程なく木曾、揖斐川を合流した長良の両河川を渡り、四日市ICより東名阪道に合流して鈴鹿山系に分け入り、山々を縫って疾走。伊勢自動車道に入り第一地点「関宿」

に十一時到着。なんと四時間走行であった。  
昼食もそこそこに早速、宿場保存会半纏姿のガイドさんの案

内で散策となる。伊勢別街道・大和・東海道の三街道の分岐点で「鈴鹿の関」が置かれた所、室町時代創建、行基作の地藏尊

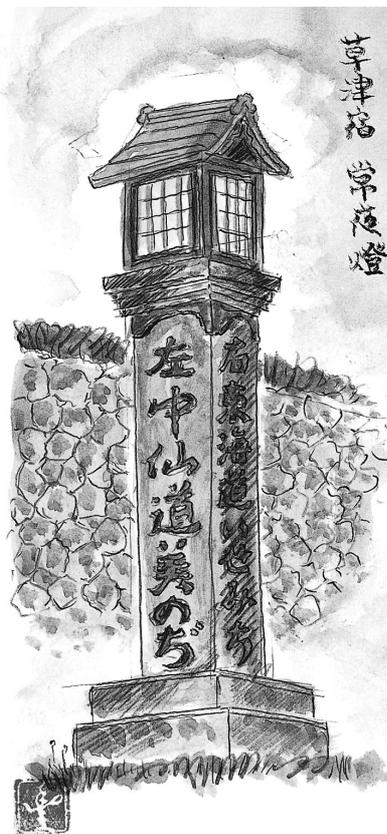


田中

を祀る地藏堂を中心に電柱も取り払われ、一・七軒にわたる宿場街が一直線につづいていた。本陣、脇本陣跡見学、街並中心の庵看板の店は寛永年間創業の銘菓「関の戸」の老舗、残念ながら休日であった。正面に漆喰の珠をあしらった旅籠玉屋は歴史資料館として公開されておりその昔の繁盛ぶりがうかがわれた。街並の格子戸や雁木に郷愁を感じつつ、散策すること二時間、予定をはるかに超過するも止むなし。十三時四十分関宿を発す。

### 関宿〜石部宿

関宿からおよそ二キロ、国道一号線をそれた旧道、三重と滋賀の県境の山の連なりの中にひっそりと「坂下宿」は見られた



が車窓より眺め、箱根と並ぶ難所鈴鹿峠を登る。国道一号線の行方には峠の山が壁となつて阻み、行き交うトラックもバスも轟音を響かせて登る。カッと照るかと思えば厚い雲が走り、雪まじりの雨、みぞれ、降らないのは槍だけと言われた屈指の峠、往時の旅人のあえぐ声が聞こえるよう。難渋の峠を越えるとやがて車は「坂は照る照る 鈴鹿は曇る あいの土山雨が降る」馬子唄に唄われた江戸から四九番目「土山宿」に入る(十四時二十分)。残る建造物は少ないが本陣、問屋場跡、軒を連ねる旅籠の木札が街道筋に記されてその繁盛ぶりをうかがうことが出来た。土山宿を出て鈴鹿の山々の溪流を集めて琵琶湖にそそぐ野州川の畔を行けば「水口宿」、歴史民俗博物館を見学(十五時

十六時四十分)。

水口宿は秀吉の命で中村一氏が築城、その後も増田長盛、長束正家と豊家譜代が城主をつとめ、関ヶ原役後も徳川直轄領となり東海道の重要な位置を占めた街で、街中で道が三つに別れる面白い構造を持つ。招婦(でおんな)の客引きが凄まじかったという水口を出て山峡を登ること四十分、昔から堅実・誠実の人を例える「石部金吉」の発祥となったという「石部宿」両山に着く。既に閉館の時間となっていたが歴史民俗資料館を開けて迎えて頂いた。館の入口に珍しい蛸足の松、聞けばこの地特有の松で「多行松」とのこと。石部宿の田楽茶屋は菜めし田楽の発祥というが見当たらず残念。石部を発ち暫く行くと近江富士三上山が美しい姿を現し、

やがて満々たる水をたたえた琵琶湖を眼前に見る。琵琶湖大橋を渡り左手に「堅田の浮御堂」を遠望、程なく琵琶湖温泉郷のグランホテルに十八時十分到着。早速当館自慢の琵琶湖を望む大風呂で汗を流し、懇親会で長駆十一時間の

疲れを憩う。岸打つ波音を子守唄に夢を結ぶ。

### 第二日 草津宿

八時ホテル出発。再び琵琶湖大橋を返し一時間、「草津宿」に着く。田中七左衛門本陣の近くに「左 東海道いせみち 右 中山道美のち」の常夜燈が佇む。現在のトンネルが通されるまで川堤を登ったという草津川(天井川)を見るも今は枯川?、田中七左衛門本陣は交通の要路に瓦葺きの平屋建物で主客・従者の部屋、湯殿等が現存し、参勤交代で立ち寄った幾多の大名・幕府役人、勅使の止宿・休憩が名札に格の高さを誇る。今に残る宿帳「大福帳」に吉良上野介・浅野内匠頭や新撰組土方歳三等の名が残り興味深い。本陣は子孫の方の努力で見事に現存されたもので、滔々と流れるが如きたつぷりの説明にその情熱がうかがわれ質問の余地もない。九時五十分草津本陣を出発し大津マラソンでおなじみの湖畔を大津に向かう。壬申の乱をはじめ幾度の戦乱で天下を征するため攻防を繰り返した「瀬田の唐橋」の疑宝珠に歴史を感じつつ大津市内に到着、大津歴史博物館見学(十時三十分〜十二時)。大津は城下町・



港町・宿場町の三要素を兼ね、関ヶ原役では京極高次が関東に勝利を導き、交通の要路として栄えたと言う。館内で大津絵の絵はがきとシールを買う。「三井の晩鐘」で名高い園城寺の山門を左手に見て、逢坂山を越え名神高速に入り一路京に向かって走る。

草津く京三条

京都の桜はまだ蕾固く、咲く花の姿は散見するのみ。国道の脇、四十米の参道の奥に参拝の人影も少なくひっそりと「天智天皇陵」は座していた。京都三条大橋へは交通制限で直進出来ず五条より迂回、四条南座脇の松葉屋の「にしんそば」を思い睡を飲み込む。漸くの末、三条大橋に十二時三十分到着するも駐車の関係で急ぎバスを下車、大橋のためとで長駆の旅を祝し記念の全員撮影。三条大橋は天正十八年(一五九〇年)豊臣秀吉が五奉行の一人、増田長盛に命じて現在の形に近いものとしたという。その後、度々の改修を繰り返しながらも、この大橋のシンボルの疑宝珠は当時の姿を残し、今も変わらぬ流を見下ろしていた。関白秀次一族や関ヶ原役

二一〇号(平成十九年七月号)  
目次

鈴鹿越・近江路紀行

(東海道五十三次 関宿く京三条) 田中 豊……………1

稲葉正則・正通の通信簿

石井啓文……………5

旅のつれづれ俳句日記

剣持芳枝……………7

続・酒匂史談(新・シリーズ)

川瀬速雄……………8

片岡日記③ 片岡永左衛門……………11

小田原叢談(五十) 石井富之助……………12

新刊紹介……………14

グループ活動のすすめ 佐久間俊治……………15

富士山宝永噴火と酒匂川

(総会記念講演) 大脇良夫……………18

平成十九年度総会報告……………20

半世紀の時を経て 植田博之……………22

研修委員会報告・ご案内……………23

特別賛助会員……………24

で破れた三成以下の部将の処刑、幕末の揺籃期尊攘・佐幕両派乱れての殺戮の舞台、三条河原は時の移ろいの中に何事もなかったように青柳が風になびいていた。寛永三奇人の一人高山彦九郎の座像を遠望しつつ近くで京料理の昼食、加茂茄子の木の芽田楽に旬を味合う。京土産はここが最後とて各人京漬物・京干菓子・八ッ橋等々を買込みバスは膨れ上がった。

臨濟宗本山瑞龍山「南禅寺」に向かう。名物豆腐料理の店が立並ぶ門前町の行手には圧するが如く大三門が姿を見せる。もう二十数年前になるだろうか愚妻と来山した時、山門上で顔に隈をかき、見栄をきるアングラ芝居の一行を思い出した。南禅寺は亀山上皇の離宮として造営後、禅寺として施捨されたもので、後醍醐天皇の代には五山の

一に位したという名刹である。方丈庭園・檜皮葺の方丈(国宝)・襖絵に往時を偲ぶ。寺内には琵琶湖疎水の煉瓦造りアーチをなす水道は今も清らかな流れをとどめていた。三門の近くに一本の満開の桜に見とれ思わずシャッターを切る。寺内散策の後一同三門に登楼。石川五右衛門もどきに『絶景かな 々々、春の眺めは千金とは小せえ 々々』と景観を満喫、一同拳を拳

げての記念撮影となる。

十四時四十分名残り惜しみつつ京都東ICより名神に合流、東名に乗り継ぎ一路帰路につく。途中インターで買った「福井の小鯛寿司」「大井川の安倍川餅」で小腹を癒しつつ休憩を挟み二十時小田原に無事到着、五十三宿四九二軒、二年余に及んだ東海道の長い旅は終わった。

### 謝辞

二年間の「宿場めぐり」のそれぞれに毎回多数ご参加いただいた皆さん、行く先々で貴重な案内をして下さった有志の方々、厄介な企画を献身的に企画・実行された研修委員のみなさん、そのほか沢山の方々のご協力によってこの記念事業を無事に終えることができました。すべての皆さんに心からお礼申し上げます。

※本文中イラストは全て田中豊氏の筆によるものです。

新会員をご紹介ください  
会員を募っています。お知り合いをご紹介下さい。

## 創立50周年記念 東海道五十三次宿場めぐり実施報告

### <関宿～京都・三条大橋>

期 日：平成19年3月29日(木)～30日(金)

日 程：3月29日；小田原駅(西口) — 関宿(ボランティアガイドによる宿場めぐり) — 坂下宿(車窓) — 土山宿(一部散策) — 水口宿・歴史民俗資料館見学 — 石部宿・石部宿場の里他見学 — 琵琶湖グランドホテル泊

3月30日；ホテル — 草津宿・田中本陣他見学 — 大津宿・歴史博物館見学 — 天智天皇陵見学 — 京都・三条大橋 — (昼食) — 南禅寺見学 — 小田原駅(西口)

参加者：35名

2年間、9回で東海道五十三次宿場めぐりの旅も無事終了することができました。会員のみなさんのご協力ほんとうにありがとうございました。



京都・三条大橋へゴール

小田原の郷土史再発見

稲葉正則・正通の通信簿

石井 啓文

はじめに

本誌第二〇八号に、「大久保忠朝の通信簿」と題して拙文を掲載していただいた。

幕府隠密の秘密諜報と言われ『土芥寇讎記』(金井圓校注・新人物往来社刊)を基にした忠朝の人物評である。今回、稲葉正

通の同書の記述が手に入った。その中に、父稲葉正則の小田

原での評価が記されている。磯田道史著『殿様の通信簿』では、

「浅野内匠頭は、女と戯れ、ちつとも政務に出てこない困った殿様」と記していた。

正通の父正則も「女色を好む事、倫(道理)に越え」とあり、これまでの郷土史に見られない人間味溢れる?記述とも言えるが、小田原の農民にも過酷な課役を強いていた、とある。

疑問視されている下田隼人処刑の背景を窺わせ、貴重な史料になり得ると考え紹介する。

稲葉正道の通信簿

正道は、小田原城主であった

稲葉正則の長子で、天和三年(一六三三)、父正則隠居により小田原城主を襲ぐが、在城二年余の貞享二年(一六五五)十一月、越後高田に転封となる。『土芥寇讎記』は、転封後の元禄三年(一六九〇)の編纂である。

「48一、稲葉丹後守越智正通

従四位下侍従

紋 角切り折敷三 庚午二五歳 室、始ハ保科前ノ肥後守正之娘、

早世。後妻ハ持明院大納言

正二位基定ノ娘也。是ハ前ノ肥後守正之ノ孫也。

嫡子 稲葉宇右衛門。

本国美濃。生国武蔵。童名字

右衛門。美濃守正則ノ嫡子、故丹後守正勝ニハ孫、内匠頭正成

ノ曾孫也。内匠頭ノ妻、正成ニ恨有テ、幼息前丹後守正勝ヲ懐

ニシ、彼ノ家ヲ逃出、御城ニ走り入ル。於是大猷院様ノ御乳母

ト成リ、後春日ノ局ト称ス。前ノ丹後守ハ乳母子タル故ニ、成

長シテ御近習ニ被レ召仕ハ、才智發明ナル故ニ、段々ニ立身シ

テ、子孫今繁昌ス。今ノ丹後守ハ、承応三年甲午十一月廿八日、

従五位丹後守ニ叙任シ、義雅ト

号ス、後正通ト改。延宝九年辛酉四月九日、御奏者、再ビ寺社奉行、両役ヲ被仰付、同十一月十五日、京都所司代職被仰付。

時ニ新規二三万石被下。天和三年癸亥閏五月廿七日、家督相続ス。時ニ父美濃守正則願ニテ、

高十万石之内、舍弟二人二八千石配分、自分ニ取り来リ三万石

ハ被召上。貞享二年乙丑十一月、所司代職御免。同廿五日京都ヲ

立テ、江戸ニ至ル。同十一日、本高ヲ以、越後ノ国高田へ所替

ス。(中略)

居城越後之内高田。本知九万九千石余(一説ニ八十万三千石ト

モ云リ)。新地開運上課役掛リ物、外ニ二万石ニ及ブ。米能ク

生ズ。私ヒ悪シ。年貢所納五ツ六ツ、秤シ五ツ二三。家中ヘ

四ツ、昔小田原ヲ領セシ時ノ例ニテ、在江戸ノ扶持ナシ。摸合

ヲ渡ス。昔ハ百日代リ、今ハ不知。寒国故、家人甚ダ迷惑ス。

家人ノ法度稠。元来奇羅ヲ好ミ、家人分ニ過、威高二立派ヲシテ、

無礼ニ見。但丹後守代ニ成テ、少シ謙退ノ躰ニ見ル。地ニ禽獸

魚柴薪多シ。(中略)

正通、生得才智利発過程也。勿論文武ヲモ少々学ブ。人使ヒ

ハ悪方也。是、仁愛ノ心ナキ故ト云リ。」

表題に48とあるのは、各大名

の石高順であり、大久保忠朝は26番目であった。冒頭、稲葉家の経歴を記している。

正道曾祖父の稲葉正成は、豊臣秀吉に仕えた後、小早川秀秋の老臣となり関ヶ原の戦で秀秋

を東軍に寝返らせた功により、慶長十二年(一六五七)美濃で一万石

を賜う(『国史大辞典』)。

妻ふく(春日局)が夫を恨んで、子正勝を抱えて江戸城に逃げ込んだとある。その後、春日

局が大猷院(徳川家光)の乳母となり、才智發明なる正勝は出世した、と記している。

正通は、延宝九年(一六三二)に京都所司代を拝命し、天和三年(一

六五五)に家督相続、四十三歳で小田原城主になっている。そのと

き、父の願いで弟二人への分与が認められるが、父正則の三万

石は召し上げ、とあるのは如何なることか。その二年後の貞享

二年(一六五五)に京都所司代職御免、越後高田に転封とある。所司代

を罷免され小田原から雪国の高田に所替とは、左遷であろうか。

「年貢所納五ツ六ツ」は、田年貢が五・六十%、「扨シ五ツ二三

分」は平均して五十二・三%のことで、「家中二四ツ」は四公六

民のことであろう。

「寒国故、家人甚だ迷惑、家人分に過ぎ威高(傲慢・尊大なこと)に立派だが無礼に見える。但し、

丹後守代になって少しは謙退(へりくだること)に見える。才知利発過ぎ文武も学ぶが、人使いが悪い方、仁愛の心がなないためである」

とは、かなりの悪評であるが、次の正則の記述も厳しい。

### 稲葉正則の通信簿

「父濃州正則モ、文武ノ心掛、勇ヲ専ラトセシ故ニ、物毎稠カリシ。此ノ正則ハ、天下ノ執權タリシカドモ、佞奸私欲ノ気味アリ。殊ニ女色ヲ好ム事、倫ニ越ヘ、妾余多此彼ニ扶持シ置、寵愛甚キ故ニ、男女ノ息モ余多出来ス。如キ斯弊ニ、金銀若干弊シ、其ツグノヒニ、小田原ノ百姓ニ、カギ役・窓役ナド云ヒテ世上ニナキ課役ヲ当テ、百姓ヲシベタクリ、困窮サセラレシカドモ、権ノ威ニ恐レテ、訴フル者ナカリシ。丹後守代ニ成テ、非義ノ役儀ヲ悉ク免ジケル故ニ、小田原ノ卿(郷)民喜ビ、今ニ於テ丹州ヲ慕フト云テ、然レバ、此ノ人ハ父ヨリハ善人ナリト、世上ニ沙汰ス。」

①カギ役 自在鍵一つを農家一世帯を数える単位とした戸数割の課役

②執權 老中のこと

正則については、小田原城主

のときの評価である。文武を心掛け物事に厳しく、老中だが佞奸(表面は柔順に見せかけて内心はねじけてよこしまなこと。口先が巧みで心の正しくないこと)で、私欲の気味もあるという。

さらに、女色を好むことは、倫(人として守るべき道。道理)を越えている。妾やその子供が余りに多く経済的に苦しいため、小田原の農民に前例にない課役を強いて百姓を虐げた、とある。

「シベタクリ」は、『日本民俗語大辞典』によると、「シベは稲の藁の芯、藁屑のシベのこと。ワラシベ長者譚に、拾ったワラシベ一本を元に、次々と価値あるものと交換して富み栄える」とある。あるいはこうした言葉から出たのであろうか。

農民は老中の権威を恐れ、訴え出る者はいなかったという。まさに、下田隼人の事件が起きたとして不思議でない施策と言えよう。

ただ、金井圓氏の解説によると、「按ずるに当時の諸侯、女色に溺れざるは希なり(巻第二十)とも記され、女色はいうに及ばず美小人を愛し、ばさらの風を好み遊興酒宴に明け暮れる当世大名風俗についての記述は、本書中の随所に見出される」とある。因みに、大久保忠朝は

「善將・良將」とあったが、これに近いと評せられた者の数は、二四三大名中、一五〇前後に過ぎないという。

そして、正通(丹後守)が城主となり、前例にない課役を廃止したこと、小田原の郷民は喜び正通を慕い、この点では父よりは善人だという。

本誌二〇八号「大久保忠朝の通信簿」で、忠朝が領主になっても郷民が丹後守を慕っているのは、正則を含めて生まれた時から小田原城主として育ったから宜なるかな、と私は記した。

が、この文書を読むと、正則に比較して正通の方が良かったからであるらしい。と、いうことは、如何に正則が小田原領民にとつては悪い殿様であったとも言えるのであろう。

こうした正則と正道父子の違いを、次のようにも記している。

### 正則と正通との比較

謳歌評説云、正通ノ事、本文ノ如クナラバ、サノミ難ナシ。但シ利発過ル程ト云ハ、不ル及ニ同。過タル故ニ、上ノ御旨ニ不叶ハシテ、所司代職ヲ被召上タリ。是智ノ過タル故ニ、不足ニ同ジクナレリ。第一仁愛ノ心ナクシテハ、一家一國トモニ豊饒ナル事アルベカラズ。況ヤ京

都ニ有テ、天下ノ政道ヲイタサレンヲヤ。威ヲ以民ヲ恐シメ、仁愛ヲ以懐、義ヲ以正シ、信ヲ以心トシ、礼ヲ以奢ヲ制シ、智ヲ以、善悪是非ノ直チニ糾明シ、親疎ヲ不分タ、蟲魚荷担ナキヲ以、道トセリ。吾智ニ慢ズル人ハ、必ズ人ノ異見ヲ不容。況ヤ家臣ノ諷諫ヲ不利用ヒ故ニ、自然ト越度出来ス。父正則、佞奸私欲アリト云トモ、天下ノ政道ニ於テハ、聊私有ベカラズ。案ズルニ、其ノ時ノ執權阿部前ノ豊後守忠秋ハ、天下ノ人普ク免シテ、賢人ト沙汰セシ。此ノ人行跡ハ荒増、当豊後守譜中ニ記ス之。可シ見。彼ノ賢人同役シテ双立ツ故ニ、佞奸・私欲共見ヘタルナルベシ。古語云、「星ノ光リハ朝日ニ消ヘ、螢ノ光リハ暁ノ月ニ陰ル」ト云リ。増者アレバ劣ル物徳ヲ失スル事、右ノ語ノ如シ。去バ、今ノ正通ハ、佞奸・私欲・女色ニ溺沙汰ナシ。此ノ儀ハ、父正則ニハ増ルト云ン歟。智ニ於テハ劣タルベシ。

- ③阿部正武(武蔵忍城主)
- ④出典未勸

正道が本文(冒頭の文章)の如くならば、それ程問題はない。ただ、過ぎたるは及ばざること。過ぎたる故に、御上に叶わず所司代職を罷免されたという。やはり転封は左遷であった。

転封後、藩政は国家老まかせであったから何事も消極的で城郭の一部を廃したり城地を狭めたり、武家屋敷を田畑に変えた。残った武家の屋根にはベンペン草が繁茂した(三百藩主人名事典)という。

「第一に仁愛の心なくして、一家一國が豊饒なことはない。仁愛で慈しみ、義によつて正とし、信をもつて心とし、礼をもつて奢を制し、智において善悪是非を糾明し、親疎で臆や荷担なきよう」は、儒教の思想であるが現代の我々にも充分教えられることである。

ただ、女色に關しては浅野内匠頭は政務にも出なかつたが、正則はそれは怠らなかつた。佞姦・私欲についても「天下の政道は聊も私有しなかつた」とある。春日局と三代將軍家光の庇



カット 内田美枝子

護による異例の出世が、両者の後ろ盾を失なつたとき、その反動が五代將軍綱吉に疎まれる要因になつたのかも知れない。なお、この後、元禄十四年(七二)一月、正道は老中に進み、同年六月、下総国佐倉城に移されてゐることを付記しておく。

おわりに

これまでの郷土史では、稲葉氏三代の小田原治世について、こうした性格的面を記したものは見られない。

下田隼人事件の背景を窺わせる内容であり、次号で事件の真偽を検討してみたい。

原稿を募集しています！

『小田原史談』会報委員会では常時皆さまからの原稿をお待ちしています。次号の締切りは8月27日(月)です。会報についてのご意見、ご感想ご要望などもお寄せ下さい。

連絡先：〒250-0003

小田原市東町1-21-18

平倉 正

電話/ファックス

0465-34-8363

### 旅のつれづれ俳句日記

剣持 芳枝

数年前の初夏の頃、友人と飛驒の里と黒部峡谷秘境の旅バスツアーで小田原を出発した。松本より安房トンネルを経て赤かぶの里へ到着、二十分の買い物時間のあと再びバスで飛驒古川へ、此所では起し太鼓の里まつり会館を見学、立体映像で飛驒古川祭りを再現出来、コンピュータによるからくり人形の実演など、見応えのある面白味を楽しむことが出来た。古い町並みを自由散策後、富山ます寿司工場へ向かった。広い工場内を係りの人の説明で見学後、夕刻宇奈月温泉のホテルに着いた。

### 白壁の多き町並み新樹光

翌朝は曇り空、宇奈月駅より憧れのトロッコ鉄道に乗車、子供のように胸の高鳴りを覚えた。走り出すと北アルプスの深い黒部峡谷のみどりが目には透みるようで、思わず息のむ一瞬だった。仏石、後曳橋、ねずみ返し、の岩壁、猿飛、人喰い石など面白い名のある景勝地の絶壁ルート、約一時間二十分かけて終点の樺平に着いた。残念なことに生憎雨となり散策は出来ず、売店で休憩して又トロッコ列車で宇名月駅へ戻った。

半日の短い黒部峡谷鉄道の旅であったが、全山を覆う万緑の輝き、眼下に岩をかむ清流の自然美、すべてが私の心に深く刻まれて忘れることの出来ない思い出になった。

### 老鶯のひと声谷を渡りけり

新シリーズ

## 続・酒匂史談

川瀬速雄

はじめに

平成一一年五月、酒匂史談を脱稿して八年過ぎました。その後先輩や友人から左記の記録誌をいただきました。

1、明治二五年。川辺家九代目川辺殷右衛門家明氏が、川辺家の安全と永く盛栄せんことを願ひ、「家法規定証」を作成した。(内田孝氏提供)

2、昭和二年。酒匂小学校訓導下沢芳治先生が、「郷土讀本」を發刊。児童教育の資料とした。(大川務氏提供)

3、昭和一〇年。酒匂小学校教育研究部が、「郷土教育資料」を發行した。(角野幸正氏提供)

4、昭和五二年。酒匂小学校開校一〇〇年記念祭実行委員会が、「開校一〇〇年の歩み」を發刊した。(PTA寄贈)

5、平成一二年。内田輝夫氏が、「小八幡歳時記」を發表。(譲原政義氏提供)

6、平成一四年。酒匂郵便局長川瀬潤氏より、「酒匂郵便局の沿革」提供。

7、平成一七年。鈴木康允氏が、平岡熙氏の伝記、「ベースボールと陸蒸氣」發刊。(鈴木康允

氏寄贈) 又、古老談話の提供、酒匂史談の補足等、多数いただき感謝しております。

酒匂雑記の未発表と提供された記録誌より数編抜粋し、「続酒匂史談」といたします。

## 1、酒匂村に於ける報徳仕法。

天保十年(一八三三)三月、小田原藩大勘定奉行鶴沢作右衛門は、身命を投げうって報徳仕法を推進したい、と云う次のような証文を二宮金次郎に送った。

「難村取直し窮民撫育の道(村を復興し、民を救う報徳仕法)は永久に残る大きな仕事だと感じたので、三年ほど修行して生涯勤めたい。したがって主役(大勘定奉行)や兼任の役を辞職し、衣類や家財道具を売払って、すべてを報徳加入金に差し出し、今日から生活を改め、身分を投げうって報徳仕法のために働くことを誓います。」

またこの年の十二月、中里村名主治郎左衛門も「報徳趣意相守るべき志願の事」という決意書を金次郎に送った。

「報徳のお諭し感服しました、今日ただいまより志を改め勤めます、証拠として田畑(五町七反歩)家財を差し上げます。報徳金五拾兩の貸付を得て借金もなくなつたので、我が家の田畑を残らず貧しい人に分けてください。返済金と家計簿は酒造の方で賄うことを父や妻子に承知させました。生涯報徳のご趣意を守って勤めたいので、決意書を差し上げます。」

作右衛門は大勘定奉行に出世し、家計は膨張し、借金千百三十拾二兩で破産状況を金次郎が借財返済仕法で救ったことによる転身法であり、治郎左衛門は名主の立場上貧農者の病人や争いを親切に世話しての借財処理で、代々続いた旧家からの転身を凶つたものである。

天保中頃(二八三)金次郎は報徳仕法を個人仕法として実践した、足柄上、下両郡で個人仕法を受けた農民は四十五名とされており、経営面積一町歩以上に三十七人を数えている、最高の経営面積を有する者は、(拾町歩百石以上)

曾比村与右衛門、十八町歩、一六八石、  
酒匂村名主新左衛門、十一町歩、一三五石、  
下新田村組頭小八、十町歩、一〇六石、

酒匂村名主新左衛門は、この内、田一町一反五畝歩、畑六反四畝歩を手作り地として手元におき、残りの田八町二畝歩、畑二町六畝歩を小作人に預けて、三百三十五俵を年々の納米として受け取り、その約三分の二を年貢米その他に当て、三分の一を収入としていた。新左衛門は、天保の飢饉(二八三、二八三)に村民の救済や、享和年中(一八三)頃より藩年貢の増加等で借財がかさみ、天保十二年(一八三)借財処理のため、持地の六割以上に当る部分を親類の福浦村名主浦右衛門に売渡す個人報徳仕法を行い借財返済を果し、再興に成功した。

又、同年、酒匂鍛冶分菓子屋源次郎も田畑四町七反歩の個人報徳仕法を実施成功した。

酒匂農民酒井儀左衛門が二宮金次郎の門弟になったのも、この報徳仕法を身近に見、又、翌天保一三年(一八三)小田原領内七十七ヶ村再建のため二宮金次郎の指導を受けることを藩に願い出たためである。

古老談話によれば、幕末、明治初頭頃より数多くの無尺講が立っていたとのこと。無尺講は、ある一家を救済するため、親類友人や近所の人数名が一定の月掛金を定め、第一回目の掛金を救済者に与え、次回からは入

札又はくじで決める、期間は一年〜三年程で、一種の貯蓄法で、報徳仕法の名残り」と云えよう。大正初期(二九三)、中市場川瀬清左衛門の屋敷内に土地を借り農家有志が精米所を建てたのもこの手の無尺講で建設費を算出したのだと聞いている。

2、大藏省印刷局酒匂工場

1、工場設立の必要性

昭和六年(一九三一)「柳条溝」に端を發し、満州事変、上海事変の戦乱が一応集結して三年目の昭和十二年(一九三三)「蘆溝橋」に於て日支の衝突が発生、当初不拡大方針で望んでいたが、戦火は燎原を焼く野火の如く拡大し、泥沼の日支事変に發展して行つた。昭和十四年(一九三九)「ノモンハン」にて日ソの軍事衝突があり、米、英、日本の日本経済封鎖に及び、日本政府は非常事態を想定した対処を考へなければならなかつた。

戦火の拡大に伴ない、政府重要印刷物の製造、戦場、占領地で使用する軍票の需要に民間の印刷工場、製紙工場への発注ではまに合わず、政府の印刷工場が必要となり万一の不測事態に備へて工場を地方に分散建設することになった。

2、工場建設地の条件  
イ、交通の便のよい所で、十坪程度の平坦地であること。  
ロ、良質の水が多量に取水可能な処。

全国的規模で検討され、東京に近く、気候温和で、酒匂川の表流水から良質の水が豊富に取水出来、拡大な平坦農地の酒匂が最適と判断された。

3、設立状況

昭和十五年(一九四〇)農地六万六千八百余坪の買収、取水量一日一万五千屯を酒匂川河畔桑原より導水することにした。土地所有農家にすれば先祖伝来の土地を手離すことに難色、反対の意思を示す者が多かつたが、国策を理由に県庁や村役場の説得、なかば強制恫喝で、やむを得ず承諾させられた。農民の儂い、せめてもの条件は酒匂、小八幡、下府中の住民を優先的に採用すること位であつた(これも口約束の為今は忘れられて無効である)。昭和十六年(一九四一)七月、地鎮祭。昭和十七年(一九四二)十二月、第一期工事完成。

4、その後の状況

昭和十八年(一九四三)より「付図」の如き外国銀行券、軍票を發行。昭和二十年(一九四五)二月十七日、七

月十日、八月三日、工場は空襲を受け四名負傷、八月十五日終戦。工場は作業停止。九月八日、米進駐軍約千二百名が工場寄宿舎と家族寮に駐留。(二十一年四月迄)

アメリカの占領政策で、軍部、財閥の解体、天皇制廃止、民主化への移行等が計画され、翌二十一年農地改革法にて大地主、不在地主の農地解放令が施行され、財閥川辺家、各寺院、別荘所有者の農地が、これ等を小作していた農民に低価格で払い下げられ、俄成金が出現し肩で風切る有様であつた。又、この年政府のインフレ対策に預金封鎖、新円切替えを実施した。印刷局で土地を買収した時の支拂代金は、七割方国債で、インフレによる金銭の下落、預金封鎖で、唯同然で土地を買収されたような結果となつてしまつた。

(泣く者、笑う者、時世といえども)印刷局が酒匂に進出したことが引金となり、昭和二十八



職員もともに建設に協力した

年(一九四五)大同毛織、東亞農薬、柳屋ポマードと、酒匂周辺に工場が進出、残された酒匂農地は住宅、商店が次々と建てられ、農村から都市型町村に変身したのも、原点は大藏省印刷局設立である。

5、余談(追憶)

私は昭和十七年(一九四二)一月、印刷局酒匂工場要員として滝の川工場に入省。三月酒匂工場に事務要員五名と設備要員(電気、機械)八名と共に転勤して来た。酒匂工場の草分け職員である。工場稼働間近に迫つた昭和十八年(一九四五)二月、現役兵として、

印刷局を休職扱いで北支那長辛店鉄道六連隊に入営し、河北省河南省、山東省を転戦。除洲と宿洲の中間附近で終戦を迎え、戦後の残務整理(邦人引揚げ者の保護、輸送、中国人への鉄道技術の指導等)で翌昭和二十一年五月、佐世保に復員。車中より見る、広島や名古屋等の大都市の焼野原に戦災の惨状を知り、我が家に帰り妹が学徒動員で印刷局に勤務、七月十日の空襲時に自宅待機を命ぜられ、自宅の爆弾被害で即死したことを聞かされ唖然とした。復員時の心境は、

堵忿雙心醜慮還

(堵忿雙心の醜慮還る)

愕然瞠目故郷山

(愕然瞠目す故郷の山)

吾爭未貳邦興迄

(吾が争未貳ず邦興迄)

視白菊清瓦礫間

(視よ白菊清し瓦礫の間)

えて部長、課長の追放交渉にまで「エスカレート」していた。これが彼等の云う民主主義、自由主義なのかと、私は理解に苦しみ悶々たる日々であった。一方村内に目を向ければ、食料の買出し、衣類と食料の闇交換、野あらし、空巢の横行、生活に追われ義理も人情もない敗戦国の実態に只々あきれるばかりであった。

そして、二十二年の正月。私は職場で外套を盗まれた。職場の同僚を疑いたくはないが外部の者が部屋に入っていないので同僚の誰かが盗んだことに間違いない。人心もこ、まで荒んでいくのかと思うと印刷局で働く意志は失せ厭気が生じて、「印刷局には私の働く場所がない」からと辞職願いを提出した。翌日、宇津木幸四郎製紙部長(私が入局した時の直接上司、工作課長)に呼び出され、「この辞表は何だ」と色々聞かれた。外套を盗まれたことは伏せて置き、「仕事もせず賃金斗争だの労働者の権利だのと、働き度くも働く場所がない、こんな事をしていたら日本の再建どころか、私自身がだめに成ってしまう。働き甲斐のある仕事を捜し度いから」と答えた。部長は、「お前は印刷局がなぜ政府直営か、いかに重要な工場か、わかっているのか。政

府の重要書類、機密書類、紙幣を印刷している所位としか思っていないのか。紙幣は化学、美術、工芸、工業その他あらゆる産業の粋が結集し、伝統の技術によって出来上るのだ、だから紙幣を見ればその国の国力がわかる」と云われているやり甲斐のある仕事なのだ。今職員がストライキだ何だかんだと騒いでいるが、これは新政策に移行する一事的なハシカの様なもので間もなく治まる。今、局は新紙幣発行の準備中だ、今しばらく待て。お前は工作課の職員だろう、製紙部門や印刷部門を支えているのが、庶務や会計の事務部門と、電気、機械、用水、蒸気等の設備部門なのだ、言わば車の両輪なのだ、お前はその片方の輪のネジかスポークなのだ。自分の仕事に誇りを持って、目先のことにとらわれ、負け犬みたいな事を云うな」と諭され叱られた。負け犬と叱られ反骨精神が頭を持ち上げ、今少し辛棒しようとした。そしてこの年二月一日全労連の統一ストライキがマッカーサの指令で中止になったのを切っ掛けに労働争動も下火となり、八月頃より抄紙機、印刷機が稼働し始め気持も幾分落ち付いて来た。



当時の印刷棟東側附近と東門守警詰所

死亡」と云ふ記事に、私は人を取締る立場の判事だ、いかに苦しくとも法に従がうと従容として死に向ったことを知り、頭に鉄鎚を受けた様な、体に電気が走った様な衝撃を受け、あ、日本には、こんな立派な、職務に忠実な人がおるんだ。職務とは、責任とは、意志とは、とつくづく考えさせられた。

よし俺は印刷局に一身を託そうと決心した。在職四十余年充実した職場生活を大過なく勤め上げ退職出来たのも、宇津木幸四郎部長の叱責と、山口判事の教訓の賜ものと深く感謝しております。

片岡日記 ③6

片岡永左衛門

大正十五年三月

一日 晴

午前八時発ニテ松田登記所ニ至リ、帰途、下郡長中村舜次郎老人ニ久々ニ面会。

幸ニ種々問答セシモ、別段ノ史材モ無ク失望。午後三時発にて帰宅。

松田も道了鉄道開通以来、是停車場ヨリ道了参詣ヘハ少キト聞シモ、関本迄ノ乗合自動車モ運転ス。

二日 晴

午後水道布設ノ件ニテ他委員ト今井町長ニ面会。

三日 晴

四日 雨

五日 雨

大蓮寺上人待夜讀経ニ来る。きよハ東京、尋子ハ横浜ヨリ、芳子も来リ、一同止泊。十二時過迄雑談、大賑ひ。是テハ亡父母も大喜ひなるへしと大笑ヒ。

六日 晴

親一東京ヨリ来リ。亡父五十回忌、母十三回忌、宏七回忌佛事

ニテ大蓮寺上人讀経。午後一同墓参シ、夕刻皆々帰宅。

七日 雨  
在宅。

八日 晴

九日 曇

十日 雨

十一日 晴

十二日 晴

宮ノ下出張所ニ行、帰途澤田氏、福住氏ニ立寄、展覧会出品ノ件ニテ相談、五時帰宅。

十三日 晴

国府津井上畑地賃貸ノ件ニテ来談、大蓮寺上人田地ノ件ニテ来談、高井氏ニ同行。

十四日 曇

十五日 雨

午後牧野氏ニ行。

十六日 晴

十七日 晴  
藩史料展委員会出席。

十八日 晴

夕刻笹井氏を訪問、報徳史ニ付、不審を質シ八時帰る。

十九日 晴

本店に至リ、四時帰宅。

廿日 雪

昨夜降雪終日ふり続も、流石に多く積らざるも、彼岸の降雪、近年希なり。

大蓮寺午後行たる不参夕にて帰る。

廿一日 晴

夜中晴たるも甚た寒かりしに、箱根は雪白し。

廿二日 晴

午後大蓮寺に行。同寺所有ノ田地も、近来ハ小作人ニ彼是多く、小作米ノ完納ノ年少く、困却セシニ、幸ニ買人有リ、先年反七十五円ニテ買入シニ、七百五拾円ニテ売却ヲ決議、五時帰宅。

廿三日 晴風

支店に立寄、龍夫同行湯河原にて下車。鍛冶屋加藤庄次郎方に行。久々にて大喜にて、そのの地走になる。同人ハ拙者先年吉濱村共有地ヲ借受、其後ニ買取

リ、温州畑ニ開墾セシ時ノ小作人ニテ、示来成墾セシモ時間ノ変遷ノ為メ不引合ヲ予想シ、近々売却シタリシニ、庄次郎は誠実ニ感シ、温州畑壺町余歩ヲ賣渡シ、特ニ金五百円ト宅地百五十坪ヲ賞与ニ遺せしニ、其厚恩子孫ニ伝為メ、宅地内ニ石に刻シ碑ヲ建シモ、多忙ニテ未タ見サルニ、震災にて破損シ、又再建セシヲ今一覽セシニ、拙文ニ呆然、龍夫ハ家族ト石碑ヲ写真ニ取り、真鶴迄、庄次郎ハ送り来リ四時半帰宅す。

二十四日 晴

宮ノ下ニ出張、堂ヶ嶋森半次郎ニ行用ニテ面会ス。同地震災之非常ニ変化シ、四圍ノ山々ハ崩落シ、悲惨トナリ。目下道路ト砂防工事中ニテ国縣ヨリノ補助にて完成ノ見込ナリト一段セシニ、温泉ハ旧時ト異ス、豊富ナリ。電車ニ宮ノ下ヨリ乘リ五時帰宅。

二十五日 晴

史料採収ニ久野久津間氏ニ至リシニ、不在ノ為諏訪ノ原ヲ散歩セシニ得物ナリ弥生式ノ破片一個ヲ拾ヒ、支店ニ立寄三時帰宅。

廿六日 晴

龍夫、本日午後帰宅。

廿七日 晴風

廿八日 晴風

廿九日 晴風

三十日 晴

出勤ノ途、行用にて曾我二面会。  
午後加奈子東京より来る。

三十一日 晴  
競馬場ハ各郡畜産組合ニテ一郡一ヶ所ノ規定トナリ、本郡ニ於テハ、国府津、小田原式ヶ所ヲ合同スル為メ、非常ノ紛争トナリシカ、昨夜協議決談シ、小田原競馬会ヨリ国府津競馬場欠損補填トシテ、今回、金四千元ニケ年ニ参万五千元ヲ交附シ、小田原ト確定セリ。

# 小田原叢談 (五十六)

## 石井富之助

### 小田原・箱根の唱歌 その二の続き

前号「小田原叢談(五十五) 小田原・箱根の唱歌その二」が途中で終りましたので今号はその続きとなります。

一 四人と生れて来しからは  
聖の道(ひより)を踏み見んと  
孔子の遺書を繙きて  
常に心を磨きけり  
二 一難去りて又一難  
世の諺の如くにて  
又もや僅か十六の  
年に母さへ病みければ  
三 眞心こめて祈りしも  
神の靈驗(しるし)や薄かりし  
愛子三人を後にして  
あの世の人となりにつけり

二 不幸不運の打ちつゞき  
先生縁者に養(なは)はる  
縁者固より邪慳(よこしま)にて  
その名も高き万兵衛が  
三 慾にくらみし眼には  
いかで情のあるべきか  
夜の間僅かの学問も  
無理無体にぞさまたげぬ  
四 晝は終日はたらきて  
夜をたのみて学ぶさへ  
非道の人にさへぎられ  
一言さへも争はず

二、されど一生無学にて  
世を終へんこそ悔しけれ  
いで我が力にためさんと  
川辺の荒地に菜を蒔きぬ  
三、早や春過ぎて夏来り  
菜実も多く得てければ  
これを燈油に取りかへて  
夜毎に学ぶ文の道  
三、慾に目のなき万兵衛は  
猶も無慈悲に罵りぬ  
先生少しも逆らはず  
油断(あか)りなくして学びけり  
三、衣にて燈火の漏れぬ様  
かくせし上に師もなきに  
心を一に師とたのみ  
鶏鳴く頃まで学びけり  
四、いつまでかくしてあるべき  
か  
先生家を興さむと  
堅忍不拔の心には  
何とか打勝ものやある  
三、人のかまはぬ土地を掘り  
人の捨てたる苗拾ひ  
一、苞余りもみのり得て  
是をば種と植えつけぬ  
三、塵も積れば山となる  
世の諺に漏れずして  
遂にその身は独立の  
嬉しき人となりにつけり  
三、家にかへれば壁落ちて  
屋根さへ草の生ひ茂り  
花の園まで荒れはて、  
見る影なき姿なり  
三、先生独り相手なく  
屋根をつくろひ草拂ひ

辛苦かんなん年を積み  
遂に一家を興しけり  
三、この頃天下に名を得たる  
小田原候の老職は  
服部なんと呼びにけり  
家事の不如意に借財に  
三、嵩みくくして一千両  
償ぶ事のかたくして  
職さへ辞せん有様に  
ほとく困り果つる時  
三、早くも先生の人となり  
聞きて整理を頼みける  
再三再四頼まれて  
いなみ兼てやうけがひぬ  
三、家風をいたく改めて  
ひたすら質素儉約に  
くらしなすやう計ひぬ  
隙行く駒の足早く  
三、五つとせ過ぎて千両の  
借財ここに返しつき  
猶も余れる三百両  
皆先生の賜ものと  
三、残らず謝意に贈りしを  
奴婢(めしつか)にぞ恵みけり  
その廉潔慈悲(いさよきよなまな)には  
誰か感ぜぬ者やある  
三、当時小田原分家にて  
宇津家領せる下野の  
櫻町こそいとあしき  
土地ならはしの其上に  
三、田野隈なくあれ果て、  
政治(まつりごと)さへ廢れしか  
世話頼まれて先生は  
直ぐに祖先の墓につけ  
三、田地畑売り拂ひ



カット 内田美枝子

妻子をつれて移り行き  
 日々の生活も節儉に  
 民の難儀は我が事と  
 三、朝な夕なに領内を  
 歩きめぐりて勤めぶり  
 洞察玉ひて聊かも  
 信賞必罰誤らず  
 五、月に叢雲花に嵐  
 初めのほどは色々の  
 さまたげ起り先生も  
 なさん術なく惑ひしも  
 六、十とせの苦心あらはれて  
 土地も開けつ家も建ち  
 憂ひも変じて喜びの  
 巷とことばなりにけり  
 四、勸喜懲悪違ひなく  
 老をいたはり金恵み  
 村長始め村民を  
 論して家を起さしめ  
 四、一身一家をなげうちて  
 國の益をば計りたる  
 誠意誠実なし遂げて  
 七十一期に下野の  
 四、市官官舎にみまかりぬ

明治の御代の聖明に  
 ますく功績顯はれて  
 畏きあたりに達しけん  
 四、贈正四位に叙せられて  
 小田原城中報徳の  
 神とその名も高らかに  
 尊き社に祭られぬ  
 六、陽気発して金石も  
 亦透すとやいにしへの  
 人の言の葉よく守り  
 忍耐勤勉なす時は  
 四、何とか事業のならざらん  
 先生もとは一農夫  
 千辛萬苦のかずくを  
 積みてとげたる成功は  
 四、世の龜鑑なれ心して  
 其の成功の源を  
 胸に修めて國のため  
 勉め勉めは我が稚児よ

わたしのメモの中には『唱歌  
 萃錦上巻』に収められているも  
 のとしてさらにもう一つある。

二、宮尊徳先生  
 一、小田原侯の重臣の  
 借財かさみいかにとも  
 つぐなふ術もなかりしに  
 その整理をばひきうけて  
 質素儉約うち守り  
 遂に恢復いたされぬ  
 三、余れる金の三百兩  
 御礼なりと贈りしを  
 一文残さず奴僕らへ  
 分ち與えて恵みたる

その潔き心には  
 感ぜぬ者ぞなかりける  
 三、小田原侯の分家にて  
 下野の國宇都木領  
 土地の慣はしいと悪しく  
 田畑荒れはていたりしを  
 十とせの間苦心して  
 遂に拓きし櫻町  
 國の為ぞと吾身をも  
 四、家をもすて、盡したる  
 功績によりてお上より  
 贈正四位に叙せられて  
 小田原城に祀られし  
 二、宮神社尊しや

最後に、これも『新編教育唱  
 歌集』の中にある『曾我兄弟』  
 を紹介しよう。

曾我兄弟  
 一、富士の裾野の狩の庭  
 関八州のつはものを  
 集めてここに狩くらす  
 威勢かがやく右大将  
 二、目ざすかたきの祐経が  
 陣屋は何處こよひこそ  
 討ちて恨みをはらさんと  
 待てば夕べの暮れがたき  
 三、晴れ間も見えぬ五月雨に  
 燃えんとしてはまたしめる  
 松明の光をたのみにて  
 忍び入りこむ敵の小屋  
 四、いかに祐経とくさめよ  
 曾我の五郎ぞ十郎ぞ  
 忘れもすまじ父の仇

討ちに來ると知らざるか  
 五、刀とるより立ちあがる  
 敵めがけて兄弟が  
 岩もとほれと斬りつくる  
 みよや孝子の一念を  
 六、見事あだをば報ひたり  
 心にかゝる雲もなし  
 縛らばしはれ斬らばきれ  
 命生きても何かせん  
 七、五月雨はれて千秋の  
 雪なほ白し富士の山  
 清くけだかき姿こそ  
 わが國民の鏡なれ

わたしのメモにある唱歌はこ  
 れだけである。なんべんもい  
 ようだが、まだこのほかにた  
 さんあるであろう。御存じの方  
 があつたらこれにつけ加えて  
 いただきたいと思う。

新  
 会  
 員

- 神野 功二 小田原市蓮正寺七〇七四四 TEL 三七一―一四七五  
 石井 勇 小田原市浜町四―二五―一四〇 TEL 二二―一九五六  
 香川 功 小田原市飯田岡三〇八 TEL 三七―一七九五  
 井原美智子 小田原市城山一―四一―〇〇三 TEL 三四―五二五二  
 石田 定雄 小田原市穴部四二―一七七 TEL 三五―六一四三  
 片野 昭幸 小田原市南町三二―二四一 TEL 二二―四八〇〇

## 新刊紹介

『小田原市史ダイジェスト版』

おだわらの歴史

平成十九年三月十五日発行

(編集発行) 小田原市立図書館

(編集委員) 村上直・黒田基樹・

下重清・森武麿 一三九頁

《目次》(執筆者)

1 掘り出された原始・古代の遺跡(杉山幾二)／2 大和政権下の足柄地方(鳥養直樹)／3 律令国家の官衙と村むら／4 封戸租交易帳と小田原市域／5 早川荘の世界／6 石橋山合戦(森幸夫)／7 曾我兄弟の仇討／8 成田荘の莊園領主・地頭・百姓／9 御家人大友氏の活躍／10 鎌倉時代の東海道と酒匂宿・国府津宿／11 小田原宿の成立と西相模の動乱／12 小田原城主大森氏(黒田基樹)／13 北条早雲の小田原城経略／14 小田原北条氏の成立／15 久野北条氏の人びと／16 戦国時代の村落と民衆／17 小田原城下の人びと／18 謙信・信玄の小田



原来襲／19 小田原城の構造／20 北条氏の構造改革／21 小田原合戦／22 小田原藩の成立(下重清)／23 稲葉氏の小田原入封／24 小田原藩の検地／25 紹太寺と鉄牛／26 河村瑞賢と小田原／27 大久保氏再入部と家臣団(馬場弘臣)／28 相次ぐ災害と小田原(下重)／29 酒匂川の洪水と治水(関口康弘)／30 城下町小田原(下重)／31 城下町商人と藩財政(馬場)／32 小田原浦と魚座(荒木仁朗)／33 小田原の江戸文化(中根賢)／34 酒匂川の渡しと箱根関所(大和田公二)／35 報徳仕法と小田原藩(松尾公就)／36 藩政改革と大久保忠真(馬場)／37 小田原藩の海防(下重)／38 大久保忠礼と京都警衛(下重)／39 戊辰戦争と小田原(中根)／40 足柄県から神奈川県へ(森武麿)／41 小田原町の成立(星野和子)／42 教育の近代化(大西公恵)／43 小田原の実業界(森武麿)／44 近代交通の発展(山口悠)／45 別荘・別邸地としての繁栄(星野)／46 近代小田原の報徳運動(宇津木三郎)／47 小田原地域の農村社会(森武麿)／48 漁業と大漁祈願(本多康弘)／49 大正文化と雑誌『民衆』(大串潤足)／50 近代女性像への模索(星野)／51 関東大震災(森武麿)／52 宝安寺の社会事業(中村一成)／53 小田原紡績から富士写真フィルムへ(沼尻晃

伸)／54 小田原市制施行(小林啓祐)／55 戦争と市民生活(井上弘)／56 銃後の女性たち(入江健輔)／57 小田原空襲(井上)／58 戦争終結から占領へ(大串)／59 戦後文化運動(高岡祐之)／60 文芸復興と活字メディア(大串)／61 生活と健康の再建(中村)／62 教育の民主化(大西)／63 漁業の復興(森脇孝広)／64 工場誘致と開発(沼尻)／65 町村合併と都市計画(小林)／66 ミカンの発展と農家(永江雅和)／67 戦後労働運動と小田原地区労(伊藤喜代治)／68 女性のライフサイクル(星野)／69 高度成長と市民生活(星野)／70 行政の広域化と地方分権を担う特例市小田原(森武麿)

## 季節の唱歌 『夏は来ぬ』

作詞 佐々木信綱  
作曲 小山作之助

「うの花のほふ垣根に、時鳥  
早もきなきて忍音もらす  
夏は来ぬ」

この歌の初出は明治33年6月の『新編・教育唱歌集』にあり発表時の作曲は本元子でした。二番の歌詞は今では「さみだれのそそぐ山田に、早乙女が・・」と歌われていますが、初出では「・・賤の女が・・」でした。賤の女が差別用語であるとされ

昭和17年にラジオ番組「国民合唱」で現在の「早乙女」と歌われたと雑誌「音楽の友」にあります。都会つ子には「卯の花」といわれても知らぬことが多いのですが、夏の到来を告げる花だということは、この唱歌から教えられました。田園風景の懐かしさを誘われる歌です。

卯の花はウツギの木の花で、古くからサクラ・ツバキ・ツツジなどと同じように呪法に使われており、ウツギは卯杖・卯槌などに使われ、農事などの邪魔をする土地の精霊を追い払う役目をもっていましたし、その花が占いに対象となりました。

「卯の花腐し」という歌言葉もあります。陰暦の四、五月ころに咲く「卯の花」を腐らせる霧雨を気に病む農村の人々の生活感情を表している言葉です。

時鳥はカッコウの仲間です。全国の山地で見られる夏鳥です。「特許許可局」とか「テツペンカケタカ」などと聞こえるという鋭い声で鳴きます。空気を切り裂くような声をだすことから「鳴いて血を吐くホトトギス」などと形容されます。そんなところから新派の「不如帰」の題名にもなったのでしょうか。時鳥には託卵の習性があり、産み落としたチヨコレート色模様の卵をウグイスの巣に預けます。

# 集まって、好きなテーマを選び 一緒に勉強しませんか

佐久間 俊 治

## グループ活動のすすめ

(1) グループの活動は企業や団体でも必要に応じて当たり前に行われています。

課題を設定して解決の方法や方針を見出す、いわゆるプロジェクト・チーム(略してP・T・と呼ばれます)が編成され活動しています。一般的には、グループの活動とはグループのメンバーが、組織や上下関係などにとらわれることなく自由に意見を出し合って話し合い、目標や方法を見出し、また必要に応じて共同作業を行っていくことを指すと思います。この方法は企業などはもとよりですが、小田原史談会のような私的な同好の士の集まりにおいてこそ、いろいろな意味で有効なのではないのかと考えます。

漠然と歴史に興味があるというだけで会員になって、会報を読むだけでは、

知的好奇心がすべて満たされることはないでしょう。といって何かを自分一人ですべて纏めてみようとなると、まずスタートするのにエネルギーが要しますし、まして調べた事柄を纏めて文章を書くとなると、なかなか気が進まないものです。さらに、そんな障害をのりこえて書き始めたとしても、どうも人間には誰にでもなまけものの半面がありますから、書かない理由、書けない原因になることがあとからあとから発生して、どうしても途中でやめてしまいがちです。

と言って人間は、なまけものままで満足しているかという決してそうではなく、誰でも知的好奇心を持ち、知的向上心も旺盛で、常に脳細胞に対する心地よい刺激を求めている生き物であることもまた事実です。だからこそ「小田原史談会の会員」であり続けるの

です。

(2)

そこで、当会の会員がメンバーとなっていくつかのグループを作り、テーマや目標を話し合って決めて勉強してはどうだろうかと考えました。具体的には

① いくつかのテーマを選び、テーマ毎に希望を募ってグループを構成する。

② 調べるべき本・資料・訪ねるべき人・場所・分担

・スケジュールなどを話し合つて、分担を決め分業で勉強する。

③ グループで時々集まって、経過を発表して話し合う。勉強の成果(途中経過でもよいし、途中でめんど興味ある支線に入ってしまったらその部分でもよいでしょう)をまとめて会報に発表する。

(3)

① お互いが意見交換や話し合いで触れ合うこと

② グループで勉強することの効果はいくつもあると思います。効果が、とりあえず次の3点を挙げてみました。

③ お互いが意見交換や話し合いで触れ合うこと

により知的刺激がうけられる。

これは言うまでもないと思います。人間は出来るだけいろいろな人と接することが大切で、そのことで素晴らしい知的刺激を受けることができます。

②

お互いに自由に話し合うことにより気をつけ合い、ミスをなくせる。一人でこつこつやり遂げるのも一つの方法ですが、時には誰かに見てもらわないと、とんでもないミスに気づかないことがあります。

私は以前「ダイオード(二端子半導体素子の総称)」と書くべきところを「レオタード(ダンス・スポーツなどに用いる体に密着した服)」と誤って書いてそのまま活字にされてしまったある論文を見たことがあります。

これなどは編集者が気づくべきであったのでしようが、とにかくこのように人間はミスを犯すものです。勉強会を重ねるうちにこの

## 身近の良い例

小田原史談209号(07年3月)の巻頭には、「宝永の富士噴火と小田原藩」という論文が掲載されています。この論文は小田原のシルバー大賞歴史観光コース2年3組3班の研究報告です。部分的にはあるいは問題点はあるかも知れませんが、全体としては、富士山宝永大噴火とその被害の状況、農民たちの行動と小田原藩の対応などを、総合的にバランスよくまとめたもので、立派な作品だと思えます。

## ③

ようならつかりミスは相当修正されるでしょうし、思わぬ知識の欠落なども補われると思います。

ある程度の拘束力(強制力?)があつたほうが励みになる

一人での作業は誰からも何も言われないのでつい途中でやめて、そのまま途中で挫折してしまうことにもなりがちです。少しくらい辛くても、良い意味での拘束力や強制力が働いてくれると頑張つて完成してしまいます。

## 「足柄歴史再発見クラブ」

開成町に「足柄歴史再発見クラブ」という会(会長・大脇良夫氏)があります。

20人のメンバーは開成町の他、南足柄市、小田原市、大井町、松田町、山北町などの



アマチュアの世界の話です。これだけの大作は絵画に例えて言えば30号、50号の大作を描き上げるに匹敵するといつてもよいでしょうし、このような作業はとて一人ではなかなかまとめることは難しいでしょう。これこそグループ活動の成果ではないでしょうか。聞くところによりまずと、シルバー大学の研究発表はグループ毎にテーマを自主的に選んで共同で勉強してまとめあげるのだそうです。

この論文のほかにも立派な作品がいくつも見られました。グループ活動による研究のよい例が身近にありました。

住民で、メンバーの中には高校の歴史の先生が2人いますが、そのほかは郷土史の団体に所属している何人かを合わせてみな、いわば歴史のアマチュアばかりです。

この会で最近、約1年がかかりで標記の「富士山と酒匂川」という本をつくりました。富士山の宝永大噴火から300年に当たる今年、足柄平野の小・中学校で副教材に使ってもらうことを目的につくったものです。メンバーみんなが集まって目標と方針を話し合い、分担とスケジュールを決めて一年あまりにわたって共同作業をしました。

素人なりに議論しあったりシンポジウムを聴講したり、原稿を読みあつたり図版を選択したり工夫し、趣旨に共感された中学校の美術部の生徒さんの挿絵の製作などの協力もあつて、やっと1冊の本を完成させることができました。

専門家の眼から見るとまだまだ欠点だらけなのかも知れませんが、長所もいくつかあるのではないかと、自負も少しあります。

この作業を通じていくつかの感想を持ちましたが、その一つは「グループで話し合っ

て頑張れば、相当なことをやりとげることができる」と改めて感じたことです。

グループ活動による勉強をはじめませんか

小田原史談会活動の中心は会報の発行であり、その基は会員が論文を書くことです。

これまでも沢山の優れた論文が誌面を飾ってきた実績があります。といって誰でもが書けるかというとなかなか難しいと思います。「論文」という言葉が堅苦しくていけないのかも知れません。「文章」とか「原稿」でいいのでしょうか。

編集担当の側からは「誰かが何かを書くのを待つ」のは、なかなか文章は集まりません。そうは言っても一方の執筆する側としては「誰からも何も言われなければ」なかなか文章を書く気にはなりません。

双方のこんな悩みを解決する一つの方法として、また小田原史談会の頭脳と活動の活性化の一つの方法として、「有志でグループをつくり、勉強会を行って、その成果を文章にまとめ」どんだん、小田原史談誌に発表してみようではありませんか。



大脇良夫 (足柄歴史再発見クラブ 会長 小田原史談会理事)

## 「富士山宝永噴火と酒匂川」

### — 酒匂川の治水神を考える —

今年(2007年)は、富士山が大爆發した「宝永噴火」(1707年)から300年にあたり

ます。  
宝永噴火については「小田原史談」の第209号(19年3月発行)の巻頭に「宝永の富士山噴火と小田原藩」と題してシルバール大学の研究グループによる研究が掲載されていますので、是非お読みいただきたいと思えます。ただこの研究は噴火後の幕府・小田原藩の対応を中心テーマとされており、本講では噴火の酒匂川に与えた被害を復旧し堤防の安全を祈願した「治水神」を主題にしたお話をさせて頂こうと思えます。また、私たちのグループの一員でもある佐久間俊治氏の労作である大判の資料「足柄の自然史」もご参考になさって頂きたいと存じます。



この宝永噴火の際の「降灰」が酒匂川に厚く溜まり、川底が

浅くなって少しの雨でも酒匂川最大の難所である岩流瀬、大口などの土手を崩して大洪水を繰り返し、足柄平野は洪水氾濫地帯となります。享保10年(1725年)幕府の命を受けた田中丘隅が責任者となって復旧工事を完成しますが、その際丘隅が土手の「永遠の安全を祈念して、岩流瀬堤(山北)と大口堤(南足柄)にそれぞれ「文命宮」と「文命碑」を建てたことは足柄平野ではよく知られています。この「文命宮」の建立は、京都・鴨川(加茂川)治水の故事に倣ったものと思われ、そもそも「文命宮」と言う名称は、黄河の氾濫を治めたとされる中国の最古の王朝「夏」の「治水の神」、禹王の祠(禹王廟)を建て

加茂川の安全を祈願した故事に倣ったもので、禹王の字(アザナ)が「文命」であることから、足柄では「文命宮」、京都では「禹王廟」とおまに呼ばれ使われていますが、同じものです。このことを踏まえて考察の視点

を、岩流瀬堤に建つ治水神・文命宮を見直すこと、大口堤にあった文命宮はどこにいったのか、さらに京都の「文命宮(禹王廟)」はどこにあったのかなどについて考えて見たいとおもいます。まず、酒匂川・鴨川の

「文命宮」の概要ですが、酒匂川の文命宮は岩流瀬堤と大口堤に1726年(享保11年)にほぼ同時期に建てられたということ『新編相模国風土記稿』にあります。京都の禹王廟はそれより500年ほど前の1228年(安貞2年)に、禹王を祭った祠を建てたものと『雍州府志』にありますので、酒匂川の文命宮は京都の前例に倣ったものとおもわれます。

大口・福沢神社内文命東堤碑文  
酒匂川・岩流瀬堤(文命西堤)に  
現存する文命宮は、山北町岸の  
岩流瀬橋の北、岩流瀬土手尻に  
建っています。さきほど申しま  
したとおり、文命西堤碑とも  
に1726年4月に田中丘隅に  
よって建てられたもので、富士  
山宝永大噴火による降灰で酒匂  
川の洪水氾濫が続き、今日的に  
いえば激甚災害地の指定を受  
け、丘隅が將軍吉宗、大岡忠相  
など幕府の期待を一身に受け、  
酒匂川の実情や地元に伝わる技  
や知見を持つ人たちを活用し土

手の修復にあたり為し遂げますが、その際に土手の安全を祈念し、鴨川の故事にならって岩流瀬堤と大口堤に建立しました。

その、文命宮建立の目的は大  
口福沢神社に現存する東堤碑に  
詳らかで、瀬戸長治氏の整理す  
るところによれば、治水には成  
功したものの神の加護がなけれ  
ば土手(堤防)の永久の維持は難  
しい。鴨川の治水工事に際して  
堤に禹王を祀った祠を建て堤の  
安全を祈願した故事に倣い、神  
禹の座を堤に建てた「もの」と考  
えられます。当時から治水は難  
事業(当時の技術力は現在のそれ  
の十分の一程度であったと言われ  
ます)で、その維持も大変です  
が、神に願ひ続けることで叶え  
られるとする中国黄河の教えに  
倣って、神禹のご利益に預かる  
べく祭祀に際して、村民がそれ  
ぞれ土手に石を運び、積んで補  
強を意識することが大切である  
ことを論じたものです。(50年代  
までこの祭祀に石を運ぶという風  
習が残っていました。)

わが国に現存する禹王の堤碑  
は、群馬県利根郡利根村や片品  
村に大正時代に建立されたもの  
や、大阪府三島郡島本町(建設  
時期不明)、高松市香東川(17世  
紀)、大分県臼杵(1720年)と、

酒匂川の2つを含め7箇所が把握されています。他にもまだある可能性はありますが、「文命宮」は酒匂川の岩流瀬の文命宮以外にその存在が報告されていません。京都・鴨川の文命宮も現存の可能性が低いことから、岩流瀬の文命宮は日本唯一・最古のものと言えそうです。

岩流瀬の文命宮の石祠は意匠的にも優れた造形で、『山北町史』も「・・意匠的にも優れた当地方の代表的な石祠・・」とあります。碑は笠石と礎石の間に四角い石を挟み、そこには2文字3行の刻字があり「水土大禹神祠」と読み取れ、中央部分の鉄製の扉部分は「宮」を除き判読できませんが、スペースなどから「文命宮」であると思われます。扉の内部には空洞があり、かつてご神体が祀られていたのではないかと推察されます。

東堤碑の碑文には「・・堤に神禹を祀る祠を建て・・」とありますし、東堤にも文命宮があったはずで、東西の堤碑の大きさや碑文の長さから推して、西堤より大きく立派な文命宮であったはずですが、今ではその存在すら忘れ去られようとしています。天保5年(1834年)の「大口文命宮諸事書上帳」に石祠と神体についての記述があ

り、同12年(1841年)完成した『新編相模国風土記稿』の斑目村の項に、祠が大切に保存されていた様子が伺われる文命東堤の絵図がありますし、明治12年(1879年)の「足柄上郡神社明細」にも祭神は「夏禹王」とあり、享保11年に田中丘隅が創立したとあります。明治42年(1909年)に7地区の社祠を合祀、福沢神社に改名したともありますが、大正12年(1923年)9月の関東大地震で文命社の鳥居、笠石などが崩壊する大被害を受け再建できず放置された、との言い伝えがあります。

私はこの笠石こそ西堤の文命宮の一部であったと推測しています。

福沢神社(南足柄市)の東堤碑の碑文には「京都・鴨川の堤に神禹を祀る祠を建てた前例に従った・・」との箇所があり、「文命宮は日本に2箇所、西は京都の加茂川の堤、東は相州・酒匂川の斑目村大口(文命堤)にあり・・」との関七郎兵衛(幕府勘定方)の言が記載された文書(斑目村願書(1849年)も)あります。

さて、鴨川(加茂川)の「文命宮」ですが、川沿いに碑は多いのですが文命宮(夏禹廟)を伝える碑は発見されていません。「雍州府志」には2箇所、いず

れも旧五条大橋の河原の、神社門「夏禹王廟」と寺院門「地藏堂」に記載があります。旧五条大橋(牛若丸と弁慶の伝説の橋)はかつて川幅260mもあったようですが、豊臣秀吉の聚楽第、二条城、方広寺大仏殿などの建設にともなう大改造で、橋付近も大変貌したようで、この時から旧五条大橋は「松原橋」と呼ばれるようになりました。この工事で河原の中島の清明塚辺にあった夏禹廟などの「治水神」は悉く破壊されてしまった可能性が大きいのです。

鴨川の文命宮(夏禹廟)が存在した可能性のある地は、旧五条橋(現・松原橋)から眼疾(メヤミ)地蔵仲源寺までの500mほどの範囲の内にありますが、これは酒匂川の文命宮が治水の要諦である岩流瀬と大口といった近距離に置かれたと同じです。

黄河流域に栄えた中国最古の王朝・夏の治水神(文命)が、黄河―鴨川―酒匂川と、4000年の時を越えて結ばれていたことを知る時、歴史の重みを肌で感じます。

中国から平安時代の皇都・京都を経て、富士山宝永噴火後の復旧をめざす江戸中期の足柄平野・酒匂川に辿りつくまで、ど



岩流瀬の文命宮

んな経緯があったのでしょうか。

誰が、どのように関わって中国最古の『治水神』が酒匂川に渡来してきたのでしょうか。この間にどんな物語が存在していたのでしょうか。この歴史ドラマを探究することで古代の中国と日本を繋ぐ新たな視点が生まれるかも知れません。中国と日本の文化の交流と接点を示す「文命宮」には限りないロマンと夢があると今でも考えております。

ぜひ本場の文命宮を探索するために中国を訪れたいと計画しており、治水神・文命宮のルーツに敬虔に手を合わせ、酒匂川や鴨川の安寧を祈りたいと思っております。

熱心にお聞きいただき有難うございました。

(文責 平倉 正)

平成19年度

# 総 会 報 告

小田原史談会

- 日 時 平成19年4月21日(土) 13時開会
- 場 所 小田原市民会館 第6会議室
- 総会次第 別記の通り
- 講演会 講師；足柄歴史発見クラブ会長・小田原史談会理事 大脇良夫氏  
★「富士山宝永噴火と酒匂川」
- 懇親会

議事次第；

議長；中野家孝 書記；田中 豊

## 第1号議案 平成18年度 事業報告

1. 一般事業報告並びに常任幹事会・役員会報告（会長：小野意雄）  
創立50周年を17年度に迎えて記念事業を開催してきた。幸い多くの賛同・協賛を得て本年度に2年間継続の記念事業「東海道五十三次の宿場町めぐり」を好評裡に達成できた、などの成果を通じて、小田原史談会の使命を痛感し、会員の力をより強め発揮する方向性が見えてきた。  
この息吹を新年度につなげたい。  
常任幹事会・役員会報告（略）

## 2. 各事業委員会報告

- (1) 会報委員会（植田博之・会報委員長）  
会報206号（7月発行、34頁、「太平洋戦争の頃の話」・ほか）  
会報207号（10月発行、36頁、「北条早雲・虎朱印の謎を解く」・ほか）  
会報208号（1月発行、32頁、「終戦後の小田原における文芸雑誌発行状況」・ほか）  
会報209号（3月発行、36頁、「宝永の富士山噴火と小田原藩」・ほか）
- (2) 研修委員会（勝俣淳一郎・研修委員長）  
・総会時に講演会（「中 勘助・文学における小田原」講師；木内英実小田原女子短大講師）  
・「東海道五十三次の宿場町めぐり」第5回（5月17日、沼津～興津宿）、第6回（6月8日、金谷～見付宿）、第7回（9月27日、浜松～二川宿）、第8回（11月21日、吉田～岡崎宿）、第9回（3月29日～30日、関宿～京都・三条惨状）と5回開催。  
総計172名が参加され、成功裡にこの企画を終了した。
- (3) 史料委員会（鳥居泰一郎・史料委員長）  
基本テーマを「第二次世界大戦後約十年間の小田原商店街の聞き取り調査」とし、6月から11月にかけて3回に亘り、台宿、青物町、一丁田、銀座通りの各商店街を聞き取り調査した。  
調査結果を「史談」第208～209号に掲載した

## 第3号議案 役員改選について

役員指名委員会を設置、その審議結果を踏まえ新役員候補を提案、19年度役員として以下の各氏を選任し本総会に提案した。

会長；植田博之

副会長；鳥居泰一郎、勝俣淳一郎、佐久間俊治

総務；中野家孝

会計；鶴井道泰

理事；青木良一、石井艶子、市川清司、植田士郎、大脇良夫（新）、剣持芳枝、桜木達夫、高田知予子、武田敏治、山口鏡子、早川初枝、平倉 正（新）、湯川玲子、吉池清、渡辺敏一

会計監査；高橋佐年、田中 豊

なお、事業委員会委員、地区役員等については総会後の役員会で委嘱することとする。

## 第4号議案 平成19年度 事業方針（新会長；植田博之）

1. 基本方針；会員相互の交流を図り、新会員の加入促進、近隣の研究活動諸団体・有識者との交流、地域文化の相互共有・再確認を図る IT時代に対応しホーム・ページ等の開設を図る
2. 各事業委員会の活動計画；
  - (1) 会報委員会；会報32頁建を標準に年間4回の発行、ホーム・ページ対応コンテンツの作成、パソコン教室の開催、近隣の歴史研究会、郷土史家との交流・資料交換促進
  - (2) 研修委員会；講演会（定期総会時）、史跡めぐり年4回を企画・実施
  - (3) 史料委員会；「第二次世界大戦後約十年間の小田原商店街の聞き取り調査」を継続、寺町、井細田、駅前各商店街を対象とする

## 第5号議案 平成19年度 一般会計予算 別 項

以上の総会議案は全て満場一致で可決承認・決定されました。

記念講演；『富士山宝永噴火と酒匂川』 足柄歴史発見クラブ会長・小田原史談会理事 大脇良夫氏

## 第2号議案 平成18年度 会計報告並びに監査報告（別 項）

総会、講演会終了後、来賓、講師、役員、出席者でティー・パーティを行い歓談の楽しいひと時を過ごしました。

1. 平成18年度一般会計 決算報告書  
(平成18年4月1日～平成19年3月31日)

2. 平成18年度総集編積立金特別会計 報告

収入の部

(単位:円)

(円)

項目	予算額	決算額	増減	摘要
前年度繰越金	417,798	417,798	0	
預り金	18,000	57,000	39,000	前納会員19名
会費	1,245,000	1,239,000	△6,000	会員413名
賛助会費	500,000	470,000	30,000	賛助会員46法人(内2口1法人)
預金利息	10	580	570	3月9月期利息
雑収入	5,000	50,000	45,000	寄付金他
合計	2,185,808	2,234,378	48,570	

区分	収入額	支出額	摘要	期首在庫	販売冊数
前年度繰越金	487,601				
本会計より繰入	200,000				
総集編 No3	9,000		1,800×5	92	5
No4	11,250		2,250×5	237	5
普通預金金利	190				
繰越金		708,041			
計	708,041			329	10

支出の部

(単位:円)

繰越金の内訳

項目	予算額	決算額	増減	摘要
総会費	40,000	33,320	△6,680	
会議費	120,000	118,565	△1,435	
連絡費	25,000	14,970	△10,030	
会報発送費	70,000	58,961	△11,039	
交際費	50,000	42,926	△7,074	
慶弔費	10,000	34,000	24,000	
事務用消耗品費	20,000	15,327	△4,673	
振込手数料	10,000	10,340	340	
宛名ラベル	15,000	3,444	△11,556	
研修委員会費	0	7,046	7,046	別途特別会計
語部委員会費	40,000	9,155	△30,845	
会報委員会費	40,000	16,477	△23,523	
会報印刷費	1,344,000	1,449,000	105,000	会報年4回発行(平均1回34頁)
会員名簿印刷費	10,000	0	△10,000	
積立金	200,000	200,000	0	総集編積立金特別会計
ロッカー借用費	10,800	14,400	3,600	4月に1基追加、計4基
雑費	30,000	3,575	△26,425	
合計	2,029,800	2,031,506	1,706	

	預金種別	金額	預金先
	普通預金	508,041	かながわ西湘農業協同組合足柄支店
	定期預金	100,000	同上
	定額郵便貯金	100,000	小田原郵便局
		708,041	

総集編在庫所在

	伊勢治書店	平井書店	アルファ	アメリカヤ	計
No3	3	2	0	82	87
No4	3	2	220	7	232
計	6	4	220	89	319

以上、報告します。

担当/会報委員会 委員 武田敏治 ㊟

18年度集決算	収 入	2,234,378
	支 出	2,031,506
	残 高	202,872

上記の通り平成18年度一般会計決算報告をいたします。残額202,872円は平成19年度一般会計予算に組み入れます。

平成19年4月7日 会計委員 鶴井道泰 ㊟

本日、会計監査の結果、一般会計、特別会計共に帳簿の処理、領収書など適切に処理されていたことを報告します。

平成19年4月7日 監事 高橋佐年 ㊟  
監事 佐久間俊治 ㊟



総会風景



懇親会風景

### 半世紀の時を経て

会長 植田博之

創立五十周年記念行事の一つ、東海道五十三次は三月末、京都三条大橋に無事到着、すべの記念行事が終わりました。今改めて、多くの郷土史家に支えられてきた老舗、小田原史談の半世紀の重さを感じさせられます。

昭和三十年(1955)創立時と今を比較すれば、社会の仕組みも街の様子も、すっかり変わり当時では想像もできない変貌を遂げてまいりました。

歴史を知る楽しみ方も、古文书からインターネットにいたるまであらゆるメディアによって知識が得られ、また後世に伝えていける時代になりました。

その中で史談会の課題も多く、若手会員の募集や、グループ活動の活性化、西湘地区二市八町の合併を踏まえた小田原地方歴史愛好家との交流等、新しい史談会に期待されている役割も山積みされています。

このような変革の重要な時期に、この度、役員会・総会のご指名により会長をお引き受けることになりました。浅学非才の私にとっては大変

荷の重い仕事なのですが、約十年間、総務、会計、会報の任を通じてご指導いただいた先輩諸氏の更なるご支援を期待して、新しい史談会を目指して微力ながら尽くしてまいりたいと思っております。

また会員皆様の、積極的なご意見を伺い運営等の改善に努めていきたいと思っておりますので宜しくお願いいたします。



会長の交代に伴い、長年事務局をお願いしておりました、アオキ画廊さんから、会長宅へ変更いたしますので何卒よろしくお願いいたします。

#### 小田原史談会事務局

〒256-0816

小田原市酒匂2-24-13

電話・ファックス

0465-48-9072

植田方

### 落穂集

19年度から「小田原史談」の編集を担当することになりました。50年を越える会の歴史とそれを裏付ける209号にも及ぶ「会報」の発行は、それだけで十分な重みと責任を感じさせます。

そんな重要な仕事を担うことが出来るのか、正直言って自信がありません。とは言え引きうけた以上は全力を挙げて取り組む所存です。

幸い豊富な経験と知識を備えられた編集委員の方々がいらっしゃいますし、会報「小田原史談」に対する役員をはじめ会員諸氏の厚い信頼と支援はこれからも変わらずお寄せいただけることを信じて、我武者羅に進んで行くだけと自らを励まして取り組みますので、変わらぬご支援、ご指導を心からお願いたします。

今月号には「共にまなぼう」の提案もありますし、新規活動の取り組みの計画もあります。なによりも、掲載するのに困るほど沢山の原稿が集まって編集委員会が有難い悲鳴を上げて困るようになることを心から願っています。

さて、今年も間もなく暑い夏

とともに八月十五日がやってきます。終戦後生まれの方々が過半を占めるようになった今日では、終戦記念日の意味も薄れていくのかも知れませんが、編集子のように戦争の最中に子供時代を送った者にとって、あの日の、焼け付くように厳しく照りつけていた太陽、マツ青な青空に浮かんでいたマツ白な雲、そして雑音ばかりで何だかよく聞き取れなかった玉音放送、どれもこれも60年余たった今でも鮮明に思い出され、忘れられませんが。平和を失った苦い経験を身に沁み込ませてくれました。

次代を背負う子供たちに決してあんな経験をさせないようにならねることが、せめて先輩として出来る最大のプレゼントではないかと、あらためて心に刻みたいと思っております。

編集子 平 倉 正  
TEL(34) 8263

#### 計 報

石井 敏三氏

松田町神山三三八

勝俣 愛子氏

南町二一四一二七

謹んでお悔やみ申しあげます。

## 平成19年度 第1回史跡めぐり実施報告

## ＜石垣山一夜城から長興山＞

期 日：平成19年5月20日(日)

日 程：小田原駅(東口) — バス — 石垣山一夜城(二の丸⇒井戸曲輪⇒本丸⇒天守台他) — 早川石切丁場跡 — 長興山(総門跡⇒清雲院(現・紹太寺)⇒長興山開発記念供養塔⇒稲葉氏一族の墓所⇒鉄牛和尚の寿塔他)

参加者：21名

天候にもめぐまれてだいふ歩きましたが、中野家孝氏の案内により楽しく一日を過ごすことができました。



## 平成19年度 史跡めぐり 実施計画

19年度第一回の「史跡めぐり」は、上記のとおり多数の参加者とともに楽しく終えることができました。

今後も次のとおり実施してゆく予定ですので、多数のご参加をお待ちします。

(実施要領の詳細は、決定し次第「小田原史談」誌上でお知らせします。)

- 奈良方面への旅  
飛鳥路～資料館～飛鳥水落遺跡～飛鳥寺～川原寺 ほか  
実施予定 11月末 (一泊旅行)
- 新春初詣  
深川八幡宮～富岡八幡宮～冬木弁天堂～清澄公園 ほか  
実施予定 20年1月
- 三浦方面の旅  
三浦道寸の墓～北原白秋詩碑～三崎古寺～金沢文庫 ほか  
実施予定 20年3月末

特別賛助会員

暑中御見舞申し上げます

平成十九年 盛夏

小田原史談会 会長 植田博之

小田原史談(年四回発行)

創刊昭和三十六年一月  
会創立昭和三十年七月

禁無断転載

振替

年会費 普通会員三千円  
〇〇二〇三六四三三三六  
小田原史談会

智恵袋 相田酒造店

小田原銀座 アオキ画廊

熱海 アオキクリニック

飛鳥屋

紳士服の アメリカヤ

(株) アルファ

税理士 石原和夫事務所

伊勢治書店

かまぼこ

(株) オクツ薬局

小田原ガス

小田原報徳自動車

かまぼこ籠 清

(株)カネボウ化粧品小田原工場

神尾食品工業

かみやま小児科クリニック

興電社

小伊勢屋

国府津館

(有)小松石材店

COMTEC コムテック株式会社

さがみ信用金庫

趣味のこふく さくらい

箱根湯本温泉 春光荘  
雀のお宿

小田原 冬 考のかまぼこ

辰寿堂スポーツ

高木整形外科医院

手打しょうばん小田原城趾前 田毎

網元直営 波る海

そびそ二宮

茶半家具株式会社

ちんぎろ本店

角田ガクフ子店

東京電力(株)小田原支社

割烹料理 烏かつ楼

和菓子 菜の花

杉崎茂法律事務所

平井書店

(有) 古屋花店

株式会社 報徳

建築金物(株)星崎仲吉商店

本多時計店

米町 松坂屋

学生専科 丸マルク

諸星グループ

曾我の梅干 美の政  
壺辛・かまぼこ

みみづく幼稚園

ヤオマサ株式会社